

洛漕斗門考

——白居易「三月三日祓禊洛濱」詩をめぐって

土 谷 彰 男

一 緒言

洛陽は唐代にあっては、安史の亂を境として盛衰の二つの相貌を持つ。すなわち、盛時は西京長安に並ぶ都城（東都・神都）として「陪都」（副都）の地位を獲得する如く榮耀を極め、衰世に及んでは新興官僚の「閑人の地」として一時の光芒を放った。のち、北宋に至って「池塘竹樹、兵車蹂踐し、廢して丘墟と爲る。高亭大榭、煙火焚燎し、化して灰燼と爲る」と語られ、ついには「唐と共に滅びて俱に亡ぶ者、余家無きなり」と言わしめた如く、洛陽はまさに唐という王朝の盛衰を一身に集めたに等しい。

右の言は李格非『洛陽名園記』の論贊⁽²⁾に見える。そこで言う「兵車蹂踐」や「煙火焚燎」は、安史の亂から五代十國まで唐朝後半以降を指し示したものであり、この間は洛陽の在り様か

らしてみれば一概に荒廢の世であったと述べるのである。安祿山は天寶十四載（七五五）十二月、幽州范陽で舉兵するや瞬く間に東京洛陽を陷落した。これ以降相次ぐ動亂と侵攻により洛陽は衰退し、ここにおいて陪都の地位は失われたのである。

しかしながら、唐朝の災禍は、必ずしも洛陽の衰勢を意味するわけではなからう。つまり、この動亂の時期を通して、洛陽はそのあるべき姿について模索がなされたと考えることはできないか。すなわち、洛陽は、陪都の地位を喪失したことによって、この都城に付與された舊來の價值から脱することとなった。徳宗貞元以降、所謂「元和中興」を將來する憲宗元和にかけて、眞に「天下之中」たる都城を再興せんとするにあたって、官僚支配層の勃興を背景とした都城再生が進められてきたなかで、白居易の文學に代表される「閑人の地」の謂は、この模索の結果として捉えうるのではなからうか。

白居易は大和年間から開成會昌にかけてのその晩年に洛陽に居住していたことから、彼の作品には「閑人の地」たる洛陽の面目を窺うに足る詩篇が數多く見られる。⁽³⁾その洛陽の相貌を窺う手がかりとして、本稿では白居易「三月三日祓禊洛濱」詩并序（以下、本稿では「春禊詩」と呼ぶ）を取り上げる。なぜならば、その序には「斗亭由り、魏堤を歴、津橋に抵る」と見え、「斗門亭」「魏王池（北堤）」「天津橋」といった洛陽第一の河川である洛水とその沿岸の風景が春遊とともに詩中に象徴的に詠み込まれているからである。

なおこの際、白居易のこの作について考察を加えるべく、これに先行するものとして、本稿では貞元期の作品である穆員の「新修漕河石斗門記」「新修漕河石斗門亭記」の二作を取り上げたい。これらは、斗門を新修し斗門亭を設えた際、穆員がそれを記念して著したものであり、そこには、白居易の今次の春遊の遠因が示されており、この春禊詩の成立に少なからぬ關りを持つと考えられるからである。これら三者には洛漕斗門が共通して言及されていることから、必然、ここでは穆員の二作に對する分析を中心として検討を進めることとする。

二 「斗亭由り魏堤を歴、津橋に抵る」

白居易は開成二年（八三七）三月三日、洛濱にて行われた春禊の遊宴に加わり、舟遊を楽しんだ。このとき六十六歳、太子

少傳分司（正一品）の職にあった。⁽⁴⁾その事情は、次に掲げる「三月三日祓禊洛濱」詩の序文に詳しい。

開成二年三月三日、河南尹李待價以人和歲稔、將禊於洛濱。前一日、啓留守裴令公、令公明日召太子少傳白居易、太子賓客蕭籍李仍叔劉禹錫、前中書舍人鄭居中、國子司業裴憚、河南少尹李道樞、倉部郎中崔管、司封員外郎張可續、駕部員外郎盧言、虞部員外郎苗愔、和州刺史裴儔、淄州刺史裴洽、檢校禮部員外郎楊魯士、四門博士談弘謨等一十五人、合宴於舟中。由斗亭、歷魏堤。抵津橋、登臨汧汧、自晨及暮、簫組交映、歌笑間發、前水嬉而後妓樂、左筆硯而右壺觴、望之若仙、觀者如堵。盡風光之賞、極遊泛之娛。美景良辰、賞心樂事、盡得於今日矣。若不記錄、謂洛無人。晉公首賦一章、鏗然玉振、顧謂四座繼而和之、居易舉酒抽毫、奉十二韻以獻。

（卷三三、3812）⁽⁵⁾

ところで、この序文には「斗亭由り、魏堤を歴、津橋に抵る」と見え、舟遊の行程が明らかにされている。すなわち、斗門亭を出發し、魏王堤を南に眺め、天津橋に至るといふものであり、また、「登臨汧汧」と見える如く、今次の遊覽は東流する洛水を遡るものであった。

洛水は、洛陽第一の橋梁である天津橋のもとを東流する。魏王地（北堤は魏堤、または魏王堤と呼ばれる）を南に控えさらに東流して恵訓坊の西を過ぎると、ここに於て東北に流れる漕渠（漕河）と分流する。斗門はその分流點に設けられた水門である。そこには「上に橋有り、橋上に屋有り」（『元河南志』卷四）とある如く、人々の往來の便のため架橋がなされ、また、屋を渡した建築物が設えてあった。これがすなわち「斗門亭」（斗亭）である。

漕渠は隋代に開かれ、もとは通遠渠と呼ばれていた。分流點は洛水の中流に位置しており、そこには分流堰が築かれ漕渠に水を引き入れていた。その漕渠は「立德坊の南に至り、西に溢れて新潭を爲」（『唐兩京城坊考』卷五）した。この新潭は大足元年（七〇一）に穿たれたとも言われ、諸州の租船がここに集め置かれた（『歴代宅京記』卷九）。この當時、江南各地から運ばれた租税物資は、揚州（江都）に一旦集められたあと、大運河に沿って汴州を経由し河南府・洛陽に至る水上輸送のルート⁽⁶⁾をたどっており、洛陽に集積された物資はさらに黄河に沿って長安へと輸送された。加えて、潮位の季節變動により洛陽に到達できる時期は限られていたため、八月から九月の時期に漕渠は物資を積載した船舶が無数にひしめき合うように往來し、新潭はさながら物流の一大集積地の様相を呈していた⁽⁸⁾。

このような當時の状況に照らしてみると、斗門は、洛陽城内

洛漕斗門考（土合）

の流通の玄關口にあたり、したがって、當時の洛陽の繁榮を示すメルクマールのひとつとしてあったに違いない。言い換えれば、洛水から漕渠に入り新潭に至る線形のうえに、點としてある斗門が人々に與えた印象は決して小さくはなかったはずである。これが、本稿において洛漕斗門と呼ぶ所以である。

その洛漕斗門に關する記事は、はやくは『唐會要』卷八六の天寶元年（七四二）二月の記事に見え、このとき斗門を移設したとあることから、斗門はこれより以前にすでに設置されていたことが知られよう。これに續く貞元年間の初、洛陽に在任していた穆員は「新修漕河石斗門記」、および「新修漕河石斗門亭記」の二作を著し、このころの洛漕斗門の消息を傳えている（なお本稿では、前者を「石斗門記」、後者を「斗門亭記」と呼ぶこととする）。

穆員（七六〇？～八〇〇？）、字は與直、懷州河内の人であり、祕書監であつた穆寧の子である。貞元五年（七八九）、杜亞が東都留守の任に就くと召されて檢校員外郎となつた。文辭に工であつたとされる。集は『穆員集』十卷（佚）、文は『全唐文』卷七八三～七八五⁽¹⁰⁾に收める。傳は『舊唐書』卷一五五、および『新唐書』卷一六三の穆寧傳に見える。

なお、生卒年について觸れておきたい。許孟容「穆公集序」には、四十歳で卒したことが述べられている。このことは、傳に「早卒（蚤卒）」とあるのと符合する。ところで、韓愈には

「祭穆員外文」と題する祭文があり、それによると、貞元十六年（八〇〇）ごろに没したと見られる。したがって、生年は乾元三年（七六〇）ごろ、卒年は貞元十六年（八〇〇）、年四十であったと推定されよう。

ちなみに、元稹「酬翰林白學士代書一百韻」詩の自注に穆員についての言及があるが、これはおそらく、従兄の「穆質」の誤りであろう。

三 「新修漕河石斗門記」について

一般的に水門の設置は、治水事業と利水事業の二つの観点から、防災・産業振興（灌漑や漁業）・運輸流通のいくつかの機能が期待される。しかし、こと洛漕斗門について見てみるならば、水災を繰り返した洛陽城内にあって、防災や殖産の機能が期待されたというよりは、むしろ漕運のそれがより強く期待されていたようである。

例えば『舊唐書』卷三七「五行志」の水災に關する記事のなかで、開元十四年七月十四日に澶水が洪水を起こした記事¹⁵が見える。それによると、澶水から溢出した水流が洛水を経て漕渠まで至ったため、租船數百艘が沈没、溺死者は多數にのぼり、江南各地からの租稅米十七萬二千八百九十八石などが流出した。このため、斗門の水門を開き、水流を洛水に引き込み漕渠の水位を下げたうえで、川底に沈んだ流出物を搜索したが、四五割

しか回収できなかったという。このあたりの事情に照らしても、前述した如く、斗門は洛水の水流を漕渠に導き漕運の便を圖ったものであることは明らかである。

開元から天寶にかけて、黃河沿いの糧倉の整備と漕運の開発が行われたことによって、物流據點としての洛陽の地位は相對的に低くなった。かつて高宗は「就食」のため東都行幸を繰り返したが、玄宗となると開元二十四年（七三六）以降東都行幸が見当たらないことに端的に示される如く、このころから洛陽そのものがすでに陪都としてその重要性を減少させていたのである。この點において、安史の亂以降、洛漕の消息を傳える穆員の「石斗門記」および「斗門亭記」は、この後の白居易「三月三日祓禊洛濱」詩に連なるものとして、このころの洛陽の相貌を知る格好の材料であると言つてよい。

そこで、この二作について、作製年代に沿ってそれぞれ検討を進めていきたい。ここではまず「石斗門記」を見てみよう。

分洛爲漕、斗門在都城東南、中橋之石。舊制喉不深、口不速、其流隨之、水斯溢、旱斯涸。東有斜堰、俾其來往。終歲不脩輒壞、脩則水積高而連南北。北傷則洛巨邸趾、南傷則魚遊井廊、不脩則漕復于陸。且其地與岸、皆實新焉、不再閏而一易。每歲繕塞斜堰、泊南北堤橋之費、相與盈萬。其斗門之功不計、蓋其弊者也。

安平公治三川之暇、顧念於此之疾未去、且曰、水之性、導無不順、壅無不害。善爲水者、唯其所趣、使若自然。其要在於不與之競而已。是用浚斗門之下、以量其入、庫斜堰之上、以歸其餘。庶乎饒不爲增、傷不爲減。盈萬之費、歲收於公。而通海之波、率土之運、東西交薦、合朝宗之義焉。中橋之旁、有古堰、廢石沉于泥沙、公乃發而轉之、以代寘薪之制。省於自他山而致者、蓋百之一。猶懼剛之不勝柔、岸化於水。乃授規矩、俾之追琢。如斧斯銳、以分其衝、如月斯仰、以折其勢。積石山鬪、中流湯湯。南隣鑿龍、永代無愧。上濟行邁、是爲通橋。歲三月興作、四月畢事。人不見始而觀其終。埒其功用、不足於常歲之數。而不朽之利、與皇都洛水、垂之無窮焉。

嗚呼。物之至柔者水、不得其理者、懷山襄陵、其次決隄防、隄城邑。夫唯不爭之力、然後勝之。天下之理、一理也。制天下之至強者、其唯不爭乎。於水也見公之政、於政也見公之德。異日、觀易簡久大之業、此非其一隅哉。

公以爲成公之志者、實肆其勤、命以名氏刻于岸石、仍俾末吏謹而書之。貞元四年四月丁亥日記。

第一段は、水災を繰り返してきた洛漕に對しこれまで仲々手が付けられなかった様が述べられている。斗門の東側には分流堰（斜堰）が設けられていたが、これまで修築されず崩壊した

洛漕斗門考（十六）

ままであった。修築すれば漕渠は水高が増して水が南北に溢れて廣がってしまい、かといって修築せぬままでは水流はおのずと洛水へと流出し続け漕渠には流入しなくなるから、漕渠は水位が下がり陸に戻ってしまうという。修繕には毎年巨額の費用が嵩むことから、「斗門の功の計らざるは、蓋し其れ弊なる者あればなり」と、これまで巨額の事業費が仇となって手付かずのままであったばかりに、かえって斗門の有効性さえも顧みられなくなったと述べるのである。

第二段では、「安平公」、すなわち、後述する如く、河南尹の崔縱が土木事業を興し、洛漕の治水に成功したことが述べられている。そこでは、「其の要は之と競わざるに在るのみ」と、「不競不爭」の思想、すなわち物の性質に従ってこれを利用するといった道理（『列子』湯問篇）に基づくものであることが強調されており、さらに「不朽の利、皇都洛水と與に、之を無窮に垂れん」と、崔縱の事業が後世不朽のものとなったことを賞賛する。

これを承けた第三段は、「水に於けるや公の政を見わし、政に於るや公の德を見わす」と、今次の治水事業が崔縱の徳政の具現であったことが謳われ、「異日、易簡久大の業を觀るに、此れ其の一隅に非ざるなり」と、後世、崔縱の「易簡久大」たる政治を覽ずるにあたって、この斗門修築は決して小さくはないことを述べている。本文の基調は、治水に功を成した崔縱の

政治に對する穆員の賞賛によって潤飾されていると見ることでできよう。

ところで、この「安平公」は、當時、河南尹の職にあった崔縱を指すと考えてよい。

崔縱（七二九～七九一）は、文學で名が知られた崔璩を祖父に、また、玄宗朝で宰相の要職を務めた崔渙を父に持つ。崔氏一族は、博陵安平（現在の河北安平）の地を籍貫として世に博陵安平崔氏の名を誇り、ここから歷代に亘って數多くの名臣が生まれた。崔縱は丁憂の後、建中三年（七八三）、汴西水陸運兩稅鹽鐵使に就き、翌年、京兆尹に就いて御史大夫を兼ねた。貞元元年（七八五）、吏部侍郎に除せられ、尋いで檢校禮部尚書、東畿唐汝鄧都觀察使、河南尹の任に就いた。のち、徵せられて太常卿を拜し、貞元七年（七九一）に卒した。年六十二、没後、吏部尚書を追贈された。傳は『舊唐書』卷一〇八「崔渙傳」、『新唐書』卷一二〇「崔玄暉傳」に見える。

ちなみに、本文に「安平公」と見えているが、これについては史書には言及が見られない。管見の範圍では、陸贄「崔縱東都留守制」（『全唐文』卷四六二）に「銀青光祿大夫行尚書吏部侍郎上柱國安平縣公崔縱」とあり、崔縱は貞元元年に吏部侍郎の職にあつて「安平縣公」の封爵を得ていたことが明らかにされていることから、本文の「安平公」の謂はこれに即したものと考えられる。

崔縱が河南尹の任に就いたのは、貞元二年（七八六）⁽²³⁾であり、離任は貞元五年（七八九）である。離任については、「斗門亭記」に、安平公である崔縱が河南尹を辭めた時を同じくして「杜公」が來たと述べるからである。後述する如く、この「杜公」は杜亞のことを指しており、その杜亞は貞元五年（七八九）十二月に東都留守に就任した（なおこの時、裴諝が河南尹に就いている）。

崔縱の治績として、朱泚の亂に前後して洛陽の地に善政を敷いたことが知られる。崔縱は、亂中にあつては軍費を官費による支出に切り替えて民衆の負擔を輕減し、また、亂後は河南尹として人心の荒廢を慰撫せんと、「理を爲すこと簡易たり」と行政を簡略にした。さらに、洛陽城内の治水を善く行つたことが、舊唐書の傳に見える。そこには「伊洛水を引きて以て里閭^{りかん}を通し、都中灌漑（ここでは治水を指す）し濟^{わた}して逮^{およ}ばさること十に一二たり。人甚だ之に安んず」と述べられているのである。これら「理を爲すこと簡易たり」や「都中灌漑」と見える史書の記述は、先に「石斗門記」に見えた、斗門修築事業の記録と、「易簡久大」たる政治の賞讃のいづれにおいても、これと吻合するものである。

もっとも、「都中灌漑」については、別本に「伊雒を導きて以て里閭を通し、溉灌し貨を通すこと皆な人を擾さず」（『冊府元龜』卷六八八「牧守部」愛民）とあつて、「灌漑通貨」と示さ

れていることが着目される。すなわち、ここでは、洛陽の治水事業を積極的に推し進め（「灌溉」）運輸流通の便を圖っていた（「通貨」）とする、いわば経済活動の側面から崔縦の治績を示そうとしているのであり、そこには、この當時の實態により即した見方が表れているのではなからうか。

四 「新修漕河石斗門亭記」について

次に「斗門亭記」⁽²⁶⁾を見てみよう。

斗門卒事之月、安平公罷尹、杜公寔來。明日公會、杜公觀厥成績、即得洗心遠目之所盡、一覽四時之美。乃授中制、勅爲此亭。

有若嵩高二室、萬安闕塞、實簷前之山。清路麗都、類夫河漢、實砌下之池。春流夏雲、露風霜月、殊狀異態、同歸於勝、實座中之器。脩橋曳虹、左右扶翼、層樓飛鳳、前後擁抱、實四楹之飾。而顥氣清風、徘徊旦暮。若有所爲、凝爲清陰。不唯待羊公之登眺、李膺之臨泛、使忘機倦俗之客、得人人而私之。

或曰、二公之來也。境與耳目共清其心。心爲事源、政得於靜。有以助清靜之理、可無述乎。刊諸璿石之陰、是爲亭記。

洛漕斗門考（十六）

第一段ではまず、安平公の崔縦が河南尹を離任するや、「杜公」、すなわち杜亞が東都留守の任に就いたことを述べる。その杜亞はこの地にて崔縦の治水事業のもたらした成果に感ずる所があり、ここに斗門亭を造った。

第二段では、視線の移動に沿って、周囲の景物が宛も借景の如く取り込まれていることを述べる。水平方向には嵩山（太室山と少室山）・萬安・伊闕（龍門）のそれぞれの山岳が簷下に望まれ、垂直方向には東都洛陽とそれを貫く洛水が天に掛かる天の川の如く眼下の水際に見ると述べたあと、四季の移ろいを留める景勝を「座中之器」に、橋梁や亭閣の建築様式を「四楹之飾」にそれぞれ見立て、斗門亭の優雅な様を述べている。續いて、晋の羊祜や後漢の李膺など洛陽に縁のある人物とその故事を待たずとも、彼らの如き清廉たる人物の營爲はここ斗門亭（すなわち、それを築いた安平公と杜公の治績）に居ながらにして想念しうる、と述べられている。

第三段では、洛陽における安平公と杜公の二公の政治は清静寡欲をもたらし、老子に淵源する「清静之理」を助けるものであるとして、ここに斗門亭記を物したと述べられている。

ところで杜亞が任に就いたのは、史書等によると貞元五年（七八九年）のことである。穆員には「同德寺湊禪師院群公會集序」（『全唐文』卷七八三）の作があり、そこでは「杜揚州出でて東洛を鎮す」とあって、「杜揚州」なる人物が東都洛陽の

行政を擔ったことが述べられている。この「杜揚州」の謂こそが杜亞のことを示している。すなわち、史書に示される如く、杜亞は、興元元年（七八四）に揚州刺史に就いたことを言うのである。こののち、續いて東都留守の任に就いた。この點によつても「斗門亭記」の本文の「杜公」が杜亞であることを補強しよう。

杜亞（？～七九八）、字は次公、京兆（今の陝西西安）の人である。肅宗のとき校書郎を授かり、のち、杜鴻漸の幕府に入つた。その後、入朝して諫議大夫を授かり、元載失脚では劉晏とともにこれの尋問にあつた。德宗即位後、楊炎の輔政では劉晏に連座して睦州刺史に流された。ちなみに、在任中は權德輿と交流を深める。興元元年（七八四）揚州刺史に就き、御史大夫、淮南節度使を兼ねた。貞元五年（七八九年）、檢校吏部尚書をもつて東都留守となる。本傳はこれに繼いで、杜亞が宦官に賄賂を贈り河南尹の職を得ようとしたが、帝の知るところとなり京師に召し還されたとある。貞元十四年（七九八）に卒した。年は七十四、太子少傳を追贈された。傳は『舊唐書』卷一四六、『新唐書』卷一七二に見え、また、權德輿による碑文がある（『全唐文』卷四九七）。杜亞は杜甫の從弟にあたり、その杜甫には「送從弟亞赴河西判官」詩がある。東都留守在任中には「李元素奏獄」⁽³⁰⁾（『舊唐書』卷一三二「李元素傳」および『折獄龜鑒』卷三）の事案を起こした。史書には總じて、權勢欲

の旺盛であるあまりかえつて榮達を果たせず、利に聰い人物として記されている。

洛陽にあつて杜亞の治績は、治水の方面については史書などには見えず、ただ苑中の開墾に軍費を充て收穫から利子を取つたため民衆を窮乏に陥らせたなど、到底華々しいものではなかった。これは、揚州刺史のそれとは好對照をなすものである。すなわち、揚州では官河を通し街衢を開いて交通を整備⁽³²⁾し、ここに流通の一大據點を築いたのであつた。「漕渠を治むるに、湖陂を引き、防庸を築き、之を渠中に入れ、以て大舟を通し、隄を夾むこと高印たりて、田は因りて溉灌を得」（『新唐書』本傳）、「杜亞乃ち渠を蜀岡に濬^{さる}い、句城湖・愛敬陂を疏^{とほ}し、隄を起して城を貫き、以て大舟を通す」（『新唐書』卷五三「食貨志」）とあるように、揚州では水利事業を大々的に推し進めていたのである。愛敬陂には水門が設けられ、その功績を梁肅は「通愛敬陂水門記」（『全唐文』卷五九一）に留めている。揚州での水利事業の功績は、當然ながら東都留守の任にあたるに際して期待されるものであつたはずである。あるいは、東都に赴任して間もない杜亞に對し、穆員は揚州の功績を期待するところがあつたが故に、この「斗門亭記」を記したのであるうか。

五 結語

白居易の「三月三日祓禊洛濱」詩に戻ろう。序では舟遊の行

程が示されたあと、世を謳歌する大官の眩いほどの酒宴の座に、絲管が鳴り渡り妓女が興を添え、詩札が飛び交い酒盃が傾けられた光景が讀み取れる。繼いで「風光の賞を盡し、遊泛の娛を極む」と、暮春の洛陽の水際の景色を心ゆくまで楽しみ、さらに、「美景良辰、賞心樂事、盡く今日に得たり」と述べる。劉禹錫が「洛下今修禊、群賢會稽に勝る」と述べる如く、今次の春禊は東晉の會稽山陰の蘭亭曲水宴がおのずから想起されるものであった。春禊詩の本文を見てみよう。

三月草萋萋	黃鶯歌又啼	柳橋晴有絮	沙路潤無泥
禊事修初半	遊人到欲齊	金鉿耀桃李	絲管駭鳬鷺
轉岸迴船尾	臨流簇馬蹄	閣翻揚子渡	蹋破魏王堤
妓接謝公宴	詩陪荀令題	舟同李膺泛	醴爲穆生攜
水引春心蕩	花牽醉眼迷	塵街從鼓動	煙樹任鴉棲
舞急紅腰軟	歌遲翠黛低	夜歸何用燭	新月鳳樓西

韓愈はかつて、東都留守の職に關して前節に掲げた穆員の祭文のなかで、「(東都)留守事無く、君子の僚多し。疑忌有る罔く、維だ其れ游を嬉しむ」と述べており、この職位は多事に翻弄されることなく數多くの有徳者の間にあって、政争に汲々とせず權謀術數とは無縁に、日々出遊の樂しみを盡くすものであると述べた。これは貞元初年の謂である。大和二年のこの春禊

洛漕斗門考(十六)

詩もまさに、斯様な洛陽の風土のうえに成り立っているものであることが知られよう。

ところで、白居易には「汎渭賦」(卷三八、¹⁴⁰)の作がある。貞元十九年(八〇三)に登科した翌年のものであり、この時、渭水の舟遊に借りて、知貢舉であった高郢、時の宰相である鄭珣瑜の、二公の清廉厚恩を讃えるものであった。序に「上は時和たりて歲稔なるを樂しみて、萬物其の宜しきを得。下は名遂げ官閑なるを樂しみて、一身其の所を得」と述べるように、一見すると春遊の閑雅なる様が描かれているかの如く見えるが、

伊萬物各得其樂者 伊れ萬物の各おの其の樂しみを得たるは
 由聖賢之相契 聖賢の相い契するに由る
 賢致聖於無爲 賢は無爲に致聖たりて
 聖致賢於既濟 聖は既濟に致賢たり

と述べるように、その描寫に拂われる意趣はあくまでも二公の賞賛を原基としており、したがって、若年の氣負いもあってか、作品全體の基調は些か緊張が漲るのを見るのである。これと春禊詩を比べるならば、同じ舟遊にあり、かつ「官閑」にありながら、兩者はまったく對照的であると言わねばならない。すなわち、春禊詩に見られる手放しの放蕩において、「汎渭賦」は春禊詩に及ばないのである。

それでは、春禊詩の放蕩は何邊から由來するのであろうか。そもそも水都である洛陽の華麗な風景もさることながら、このころすでに陪都の地位を免れたことも考慮に値するところではある。

ただ、ここで注意されるべきは、この地に江南の氣風が積極的に受容されていたことである。白居易は履道里の居宅⁽³⁵⁾に於ての在任地である江南の風景を再現した如く、江南から揚州・卞州を経て洛陽に至る經路に沿って洛陽から江南の地が遠望された。この春禊詩においても江南の氣風的一端が示されていると認めることはできまいか。それを採る手掛りとしてあるのが、貞元初年、洛漕斗門を新修した二公、すなわち、崔縱と杜亞である。

杜亞はかつて揚州刺史の任にあった時、前節では水利事業を推し進め、揚州の城市を大きく整備したことに觸れた。杜亞の開削した官河は現代までその遺構を留めているという。そののみならず、在任中は江南の風俗に享樂を極めたことが、舊唐書本傳に見える。それによると、杜亞は競艇に耽溺⁽³⁷⁾したと見え、「競渡の戲」に勝利するため船底に漆を塗布して速度を増し、綺羅の服に油料を塗って漕手に着用させたので水にも濡れなかったという。「亞本と書生なり、奢縱たること此の如し。朝廷亟⁽³⁸⁾ば之を聞く」と、その豪奢な様は朝廷の耳に届くほどであった。斯くの如き人物が、今度は東都留守に就いたのである。放蕩不

羈とも呼びうるこの杜亞の入洛とともに、揚州の地から東都洛陽に江南の風が招來された。そして、その風氣が元和を経て大和初年の洛陽にまで傳えられたのであろう。穆員の「斗門亭記」はその間の事情を留めたものであると看做しえよう。

斯くして、今次の舟遊が洛漕斗門を出發地點として天津橋まで至った、その行程の理由が明らかとなろう。すなわち、貞元初年、洛陽にその名を成した人物、すなわち崔縱と杜亞の二公に向けて、あるいは思いを致し、あるいは記念しつつ、春禊が執り行われ、洛濱の遊宴が開始された。その光景は、天子の行幸が絶えて無くなった天津橋とは、全く對照的であつたに違いない。

【注】

- (1) 松浦友久・植木久行「中國の都城?・長安洛陽物語―悠久たり王城の地」(集英社、一九八七年)、植木久行『唐詩の風景』(講談社學術文庫、一九九九年)、松浦友久・植木久行・宇野直人・松原朗『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年)、妹尾達彦『隋唐洛陽城の官人居住地』(『東洋文化研究所紀要』第百三十三冊、東京大學東洋文化研究所、一九九七年)に詳しい。

- (2) 『洛陽名園記』(李格非撰)／桂海虞衡志(范成大撰)『文學古籍刊行社、一九五五年)、および『邵氏聞見後錄』卷二

五（中華書局、一九八三年）。なお、兩者には少しく文字の異動が見られる。いま、後者に據った。

（3）妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」（『白居易研究講座第一巻 白居易の文學と人生Ⅰ』勉誠出版、一九九三年）。

（4）朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）による。

（5）底本は朱金城『白居易集箋校』とした。付番は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇年）の「綜合作品表」に従う。なお、この作は、『才調集』巻一『唐人選唐詩十種』上海古籍出版社、一九五八年）に見え、詩題を「祓禊日遊于斗門亭」に作る。

（6）外山軍治「唐代の漕運」（『史林』第二十二卷第二號、史學研究會、一九三七年）、青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』（吉川弘文館、一九六三年）。

（7）『新唐書』卷五三「食貨志」漕運に見える裴耀卿の言に「送租、庸、調物、以歲二月至揚州入斗門、四月已後、始渡淮入汴、常苦水淺、六七月乃至河口、而河水方漲、須八九月水落始得上河入洛、而漕路多梗、船楫阻隘」とある。

（8）『元河南志』卷四に「天下舟船所集、常萬余艘、填河路。商旅貿易、車馬填塞」とある。佐藤武敏「唐代の洛陽と洛水」（『中國史研究』第七號、大阪市立大學中國史研究會、一九八二年）は、漕渠についてこの一文を引用したうえで、「おそらく漕渠は北市の地帯での商業交易のため水運路とし

て利用されたものであろう」とする。

（9）『唐會要』卷八六「橋梁」天寶元年の條に「天寶元年二月、廣東都天津橋。中橋石脚兩眼、以便水勢。移斗門、自承福東南、抵毓財坊南百步」とある。

（10）なお、許孟容「穆公集序」（『全唐文』卷四九七）に「大凡碑誌文冊銘讚記序六十五首、共成十卷」とある。全唐文に収めるものはこれより少ない。

（11）許孟容「穆公集序」（前掲注⑨に同じ）に「顔回、黃憲、仁而天促、揚雄、司馬遷、才而不試、穆君年逾四十、用止幕畫、竝四賢之德器」とある。

（12）韓愈「祭穆員外文」（『韓昌黎文集』卷五、上海古籍出版社、一九八六年）に「我如京師、君居父喪（―貞元十年のこと）」、および「痛毒之懷、六年以并」とあることによる。

（13）元稹「酬翰林白學士代書一百韻」詩（『全唐詩』卷四〇五）に「先是穆員、盧景亮同年應制。俱以詞直見黜、予求獲其策。皆手自寫之、置在篋篋」とある。盧景亮は貞元四年ごろ朗州刺史に左遷された。本傳は『新唐書』卷一六四に見え、「景亮志義峯然、多激發、與穆質同在諫爭地、書數上、鯁殺無所回」とある。穆質の傳には左遷の記事こそ見えぬも、「應制策入第三等、其所條對、至今傳之。自補闕至給事中、時政得失、未嘗不先論諫」とある。

（14）『新唐書』卷四六「百官志」工部、および同卷四八「都水監」「河渠署」の各項目を参照のこと。

- (15) 『舊唐書』卷三七「五行志」の水災の記事中、開元年間條に「十四年」七月十四日、灋水暴漲、流入洛漕、漂沒諸州租船數百艘、溺死者甚衆、漂失楊、壽、光、和、廬、杭、瀛、棣租米一十七萬二千八百九十六石、并錢絹雜物等。因開斗門決堰、引水南入洛、漕水燥竭、以搜漕官物、十收四五焉」とある。

- (16) 程存潔「唐代東都留守考」、『漢魏晉南北朝隋唐史資料』武漢大學中國三至九世紀研究所、一九九四年。

- (17) 「石斗門記」はその末尾に「貞元四年四月丁亥日記」と明記されており、貞元四年（七八八）の作であることが分かる。一方「斗門亭記」は「安平公罷尹、杜公實來」とあることから、後述するように、杜亞が就任した貞元五年十二月以降の作であると認められよう。ここで注意すべきは、穆員の本傳に「杜亞爲東都留守、辟爲從事、檢校員外郎」とあり、さらには韓愈の「祭穆員外文」に「君從杜公」と見えるように、穆員の洛陽在任があくまでも杜亞の就任と關わるものであり、したがって、この點からすれば、「石斗門記」を貞元四年とするのは錯簡である可能性が高いだろう。あるいは、「石斗門記」に「歲三月興作、四月畢事」とあり、これと「斗門亭記」の「斗門卒事之月」の記述が符號すると見られることから、兩作はほぼ同じ時期（貞元五〜六年?）のものであるかもしれない。いましばらくは、「石斗門記」を貞元四年、「斗門亭記」を貞元五年に置くこ

とにする。

- (18) 底本は『文苑英華』卷八二二（中華書局、一九六五年）。なお、『全唐文』卷七八二に従って文字を改めたところがある。

- (19) 底本は「工」に作るも、いま、全唐文に従う。

- (20) 底本は「受」に作るも、いま、全唐文に従う。

- (21) なお、この本文に見える「實新」は、壁に新を埋めて手抜き工事をする事。『左傳』僖公五年に見える。

- (22) 『新唐書』卷七二下「宰相世系表」。

- (23) 『舊唐書』卷二二「德宗本紀上」貞元二年九月に「戊戌、以吏部侍郎崔縱檢校禮部尚書、東都留守」とあることによる。なお、この本紀に従えば「東都留守」の任に就いたことになるが、洛陽では分司の職にあたったと見るのが妥當であろう。陸贄「崔縱東都留守制」、『全唐文』卷四六一、本文既出）に「檢校禮部尚書兼御史大夫、充東都留守判東都尚書省、…」とある。この「東都留守」は實際のところ、傳に「河南尹」と示されていること、また、次に見る「斗門亭記」に「安平公罷尹」とあることから、「河南尹」の職にあったと見るべきである。これについては、韓愈「唐故國子司業竇公墓誌銘」に「公（竇牟）始佐崔大夫縱、留守東都」（『韓昌黎文集』卷七）とあって、崔縱が「河南尹」の職にあった間は、竇牟（七四九〜八八二）が「東都留守」であったと示されていることが傍證となる。

- (24) 『舊唐書』崔縱の傳に「戍邊之師由洛陽者、儲餼取辦於編戶。縱始官備、不徵於人、令五家相保、俾自占告發斂、以絕胥吏之私」とある。
- (25) 『舊唐書』崔縱の傳に「是時兵革甫定、民耗六七、縱悉心求瘼、爲理簡易」とある。
- (26) 底本は『文苑英華』卷八二五。なお、『全唐文』卷七八三に従って文字を改めたところがある。
- (27) 底本は「無」に作るも、いま、全唐文に従う。
- (28) 『舊唐書』卷一二「德宗本紀下」貞元五年十二月の條に、「辛未、以淮南節度使杜亞爲東都留守、畿汝州都防禦使、兵部侍郎裴諝爲河南尹」とある。また、同卷一五五「穆寧傳」に見える穆員の傳には「杜亞爲東都留守、辟爲從事、檢校員外郎」と、杜亞が東都留守に就くと穆員はその辟に應じて從事となり檢校員外郎となつたことが述べられている。また、韓愈の祭文には「君從杜侯」とあり、穆員の傳と一致する。
- (29) 『舊唐書』卷一二「德宗本紀上」興元元年十二月に、「庚辰、以刑部侍郎杜亞爲揚州長史、淮南節度使」とあり、また、本傳に「興元初、召拜刑部侍郎。出爲揚州長史、兼御史大夫、淮南節度觀察使」とある。
- (30) 勾利軍「唐代東都御史臺研究」(『華南師範大學學報』社會科學版、二〇〇六年・第一期)。
- (31) 『舊唐書』本傳に「奏請開苑內地爲營田、以資軍糧、減度支每年所給、從之。亞不躬親部署、但委判官張薦、楊曠。初、奏請取荒地營田、其苑內地堪耕食者、先爲留司中官及軍人等開墾已盡。亞計急、乃取軍中雜錢舉息與畿內百姓、每至田收之際、多令軍人車牛散入村鄉、收斂百姓所得菽粟將還軍。民家略盡、無可輸稅、人多艱食、由是大致流散」とある。
- (32) 杜亞の揚州における整備事業については、羅宗眞「揚州唐代古河道等的發現和有關問題的探討」(『文物』、一九八〇年・第三期)、および岳東「唐後期與五代時南方城市的改造略論」(『天水師範學院學報』、二〇一二年・第三期)に詳しい。
- (33) 劉禹錫「三月三日與樂天及河南李尹奉陪裴令公泛洛禊飲各賦十二韻」(『全唐詩』卷三六二)。なお、この作は白居易の春禊詩と同じく今次の舟遊に参加したときのものである。
- (34) いま、春禊詩との比較の便を圖り、次にその全文を掲げる。右丞相高公之掌貢舉也、予以鄉貢進士舉及第。左丞相鄭公之領選部也、予以書判拔萃亞科。十九年、天子竝命二公對掌鈞軸、朝野無事、人物甚安。明年春、予爲校書郎、始徙家秦中、卜居於渭上。上樂時和歲稔、萬物得其宜。下括鋌逐官閑、一身得其所。既美二公佐清靜之理、又荷二公垂特達之恩、發於嗟歎、流爲詠歌。予時泛舟於渭、因爲泛渭賦以導其意。詞曰、
- 亭亭華山下有人、跂兮望兮、愛彼三峰之白雲。泛泛渭水上

中國詩文論叢 第三十三集

有舟、沿兮汭兮、愛彼百裏之清流。以我爲太平之人兮、得於斯而優遊。又感陽春之氣熙熙兮、樂天和而不憂。曰予生之幸兮、時哉時哉。當皇唐受命之九葉兮、夷與華而無氛埃。及帝續位之二紀兮、命高與鄭爲鹽梅。二賢兮爰立、四門兮大開。凡讀儒書與履儒行者、率充賦而西來。雖片藝而必收兮、故不棄予之小才。感再遇於知己、心慚忤而徘徊。登予名於太常兮、署予職於蘭臺。臺有蘭兮閣有藝、芳菲菲兮其可襲。備一官而無事、又不維而不繫。家去省兮百裏、每三旬而兩入。川有渭兮山有華、澹悠悠其可賞。目白雲兮漱清流、其或偃而或仰。門去渭兮百步、常一日而三往。夜分兮扣舷、天無雲兮水無煙。遲遲兮明月、波澹灩兮棹蜚綠。日暮兮舟泊、草萋萋兮沙漠漠。習習兮春風、岸柳動兮渚花落。發浩歌以長引、舉濁醪而緩酌。春冉冉兮其將盡、予何爲乎不樂。鳥樂兮雲際、鳴嚶嚶兮飛裔裔。魚樂兮泉底、鬐撥撥兮尾激激。我樂兮聖代、心融融兮神泄泄。伊萬物各得其樂者、由聖賢之相契。賢致聖於無爲、聖致賢於既濟。凝爲和兮聚五福、發爲春兮消六沴。不我後兮不我先、適當我兮生之世。彼鱗蟲兮與羽族、鹹知樂而不知惠。我爲人兮最靈、所以愧賢相而荷聖帝。樂乎樂乎、泛於渭兮詠而歸、聊逍遙以卒歲。

(35) 埤田重夫『白居易研究——閑適の詩想』第八章「白居易と家屋表現」(汲古書院、二〇〇六年)に詳しい。

(36) 前掲注の羅宗眞「揚州唐代古河道等的發現和有關問題的

探討」に詳しい

(37) 『舊唐書』本傳に「江南風俗、春中有競渡之戲、方舟竝進、以急趨疾進者爲勝。亞乃令以漆塗船底、貴其速進。又爲綺羅之服、塗之以油、令舟子衣之、入水而不濡」とある。